

相談支援事業所 相談に関する報告（平成27年2月～5月）

【資料6】

<所感>…全体的な所感(相談内容の傾向)、特に気になった点

<地域課題>…報告期間に感じた地域課題

【春日苑】

<p><所感></p>	<p>【主介護者及び本人自身の高齢化、病状の悪化に伴い必要となる支援調整】 主介護者である親及び本人自身の高齢化、病状の悪化により福祉サービスの新たな導入や支援内容の見直しをするケースが多くなってきた様に感じている。 特に、これまで福祉サービス等を活用しないまま、自分達の力で生活を成り立たせていたケースの多くが、支援を受けることに対しての不慣れさから生じる不安感が強い。そのことから、個々の実情に応じて慎重に話を進めていく必要があった。 今後について、生活を組み立てる手段として必要とされる社会資源(福祉サービス、医療的サービス、それに準ずるサービスや制度など)を活用していくことの大切さを浸透させていく意味でも、本人や家族への継続した関わりは勿論のこと、地域に向けた情報発信の重要性が増していると考えられる。</p>
<p><地域課題></p>	<p>【生活が成り立たなくなってきたからの支援調整による問題】 本人の病状の悪化や主介護者である親の高齢化に伴い、生活が成り立たなくなってきたからの相談も少なくない。そのことから、あらかじめ福祉サービスや医療的サービスの利用及び各種関係制度を活用できるよう周知方法について考えていくことが必要である。 【個々のニーズに対応可能な受入れ先の不足】 医療的ケア(痰吸引)へ対応できる福祉サービス事業所(ヘルパー支援、短期入所、生活介護等の日中活動先)が少ないこと、また、病院の短期入所の利用を希望するも、ベッドの空き状況により受け入れを断られてしまうことがあり、その際における支援調整の難しさを感じる人が多い。</p>

【かすがい】

<p><所感></p>	<p>【生活環境の変化への対応】 特に同居の家族が亡くなったり、病気になってしまうことで、従来の生活を送ることが難しくなったというケースが多い時期であった。このような場合、本人の身近な関係者より、早急な対応を求められるが、今まで家族だけが本人の対応を背負わざるを得なかったことによる課題は大きい。なぜなら、本人の環境や関わる人々が変わり、本人も受け止めることが難しい。尚且つ、今まで福祉に関わってこなかった親族側へ、本人を取り巻いている福祉サービス等を知り、理解してもらうことは容易ではないと感じた。更に、福祉サービスだけで本人の生活を支えきれない場合もある。</p>
<p><地域課題></p>	<p>【地域社会に根付いた障がい福祉の周知】 ・障がいに関わっていない地域住民や社会へ、障がい福祉制度や春日井市内に住む当事者の生活を知ってもらうための啓発。 【当事者を抱え込んでいる家族への支援】 ・親なき後、本人が困らないような支援体制を考えられるように、前もって、高齢の親を持つ障がい者世帯の把握や、各支援機関との連携をすること。 ・様々な当事者の置かれた現状やニーズと、事業所側の受け入れと合致しない場合、家族を含めた周囲とどのように連携して、本人の望む生活をどのように培っていくのか。</p>

相談支援事業所 相談に関する報告（平成27年2月～5月）

<所感>…全体的な所感(相談内容の傾向)、特に気になった点

<地域課題>…報告期間に感じた地域課題

【JHNまある】

<p><所感></p>	<p>【不安・気持ちの整理】 職場や家庭内での人間関係の不安や、孤独を感じて寂しさを訴える内容の相談が目立った。職場では就労継続支援事業所を利用をしている方々から、利用者間・スタッフ間の人間関係の相談が多かった。家庭内では心的距離が近いことで起きると思われる共依存による強い不安を抱える家族からの相談が数件あった。</p> <p>【福祉サービス等の調整】 福祉サービスや生活保護、障害年金申請等に関して、訪問や打ち合わせ、書類作成等で長時間を要することがあり、行政、居宅介護支援事業所、就労継続支援事業所等の関係機関との連携も重要となるケースがあった。</p>
<p><地域課題></p>	<p>【介護者の高齢化による支援力低下による問題】 本人を支えてきた親やきょうだいの高齢化により、それまでは可能だった家庭内での支援が難しくなっているケースが多い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・精神障がい者が利用できるグループホームやショートステイの社会資源が乏しい現状で、どのように住環境を整えていくのか。 ・本人の病状悪化に家族が対応できず、かつ本人が受診や第三者の介入を拒否することがあり、医療機関との連携や保健分野の支援強化が必要になってくると思われる。 ・早い段階での関わりが出来るように、地域のネットワークの強化を図る。 <p>【障がい理解の問題】 本人を取り巻く家族や関係者の障がい特性の理解不足・不適切な対応により、本人を混乱させたり、状況が改善できないでいるケースがいくつもあつた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本人、家族、支援者の障がい理解のための啓発が必要だと思われる。

【あっとわん】

<p><所感></p>	<p>【相談内容】 他機関(行政、子育て支援拠点施設、保育園など)から紹介をされて、当支援センターに相談に繋がるケースがある。その内容は、福祉サービス事業所(児童発達支援、放課後等デイサービス)の選び方や申請手続きの流れ、子どもの発達についてなど分野が多種にわたっている。</p> <p>【親支援・親自身の悩み】 子どものことで、夫婦間での意見のズレや親自身の気持ちの整理、他者(他の親、先生など)へ子どもの情報の伝え方などの相談もある。周囲の同年齢の子と比べてしまい、余計に親が不安を感じてしまうこともある。親が気持ちにゆとりを持って、子どもと関わっていけるように支援していきたいと考えている。</p>
<p><地域課題></p>	<p>【子どもの分野における連携が必要】 子どもの育ち(発育・発達)の部分からの相談が多く、子育て支援と障がい児支援の連携が必要であると感じる。地域子育て支援拠点事業との連携の強化であったり、今年度からはじまった利用者支援事業の活用など検討していくことが望ましいと考えている。</p> <p>【子どもの情報の共有が難しい】 この時期の特徴でもあるが、就園・就学・進学等により切れ目のない支援や支援の情報の共有が課題であると感じる。個人情報取り扱いもあるが、支援が必要な子どもに対して、関係機関同士(児童発達支援と放課後等デイサービス、園と学校など)が支援の情報の共有を必要と思っているのか、どこまで開示できるのか、どのように考えているのかなど調査が必要と考えている。</p>